**典礼解説：聖霊降臨後**

**三位一体の主日（聖霊降臨後第1主日）  
  
　4世紀から5世紀にかけて、教会内には、御子は御父によって造られた存在であり、御父と同一本質ではないということを主張したアレイオス（256年ごろ～336年）の異端に代表される、キリスト論や三位一体論に関する論争が起こりました。このような論争の影響を受けて、スペインやガリアの教会では、三位一体への信仰を表明する信心や説教が盛んになり、7～8世紀には三位一体のためのミサの祈願も作られました。現在のカトリック教会で三位一体の主日のミサで用いる叙唱は、8世紀半ばの秘跡書（サクラメンタリウム）に由来しています。さらに、9世紀ごろには三位一体のための信心ミサも作られ、11世紀ごろのフランクやガリアのベネディクト会修道院では、聖霊降臨の主日の次の主日に三位一体を祝っていたようです。教会としては、毎日のミサで三位一体を記念し三位の神を賛美しているということから特別な祝日を設けることには慎重でしたが、教皇ヨハネ22世（在位1316年～1334年）が1334年に全教会で祝うことを決定し、教皇ピオ5世（在位1566年～1572年）による『ローマ・ミサ典礼書』（1570年）にも導入されて定着し、現在に至っています。**

**キリストの聖体（聖霊降臨後第2主日）  
  
　12～13世紀ごろ、ミサで聖別されたホスティアにまことのキリストが現存していることが強調され、聖体への信心や崇敬が熱心に行われるようになりました。13世紀初めには、ミサの中で聖別されたホスティアを司祭が高々と掲げ、信者はそれを仰ぎ見るという習慣が生まれました。また、1209年に聖体に関する幻を見たリエージュの修道女ユリアナ（1193年～1258年）が熱心に働きかけたことを契機に聖体の祝日を典礼暦に導入する機運が高まり、リエージュ教区では1246年に聖体の祝日を祝うようになりました。これを受けて、かつてリエージュの首席助祭であった教皇ウルバノ4世（在位1261年～1264年）は、1264年に大勅書を発表して聖体の祝日を正式に定めました。この祭日の名称は、伝統的に「キリストの至聖なるからだの祝日（Festum Ss. Corporis Christi）」で、ラテン語で「コルプス・クリスティ（Corpus Christi）」とも呼ばれます。現在の一般ローマ暦では「キリストの至聖なるからだと血の祭日（Ss.mi Corporis et Sanguinis Christi Sollemnitas）」と呼ばれ、キリストの御血についての内容も含めた名称です。かつての典礼暦には「キリストの御血の祝日」もありました。これは、教皇ピオ9世（在位1846年～1878年）が1849年に定めた祝日で、7月1日に祝われていました。1969年の典礼暦の改定では、キリストの御からだと御血を合わせて祝うこととし、上記のような名称になっています。日本では、「聖体」ということばがキリストの御からだと御血の両方を表しているので、「キリストの聖体」という名称を採用しています。  
　現在の一般ローマ暦では、キリストの聖体の祭日は三位一体の主日後の木曜日と定められています。ただし、日本のようにこの日が守るべき祝日ではない場合、  
三位一体の主日直後の主日に移動して祝います（「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」７ハ参照）。**

**イエスのみ心（聖霊降臨後第2主日後の金曜日）**

**この祭日は、イエスのみ心に対する信心に由来しています。この信心は、  
イエスの内から流れ出る生きた水（ヨハネ7･37-38）や刺し貫かれたイエスのわき腹から流れ出た血と水（同19･34）に基づいて、イエスのみ心を、すべての人の救いのためにいのちをささげたキリストの愛の象徴として黙想するもので、14～15世紀の神秘主義からも大きな影響を受けています。み心の信心は、16世紀にはイエズス会によって奨励され、オラトリオ会司祭のヨハネ・ユード（1601年～1680年）は、1672年に司教の許可を得て自らの共同体でイエスのみ心を祝いました。また、マルガリタ・マリア・アラコク（1647年～1690年）は、1673年から1675年に私的啓示を受け、イエスのみ心の信心を広めるために努めました。教会としては、1765年に教皇クレメンス13世（在位1758年～1769年）がポーランドの司教の要請に応じて最初に公認し、  
教皇ピオ9世（在位1846年～1878年）が1856年に、全世界で祝うことを定めました。**